

広島県安芸郡蒲刈町

宮盛方言における比喩語

岩城裕之

はじめに

- 1 調査対象地：蒲刈町（カマガリチョー）は、広島県呉市の南東海上に浮かぶ上蒲刈島と周辺の無人の小島からなる。宮盛（ミヤザカド）には役場が置かれ、蒲刈町の行政上の中心である。なお、中心の港は隣の田戸（タド）という集落にあり、豊田郡川尻町と呉市までフェリーの便が頻繁にある。それぞれ約30分で本土と連絡する。また、宮盛からは広島港、今治港まで2往復の高速船の便がある。主な生業は柑橘栽培を中心とした農業であり、広島県でも最も古くから柑橘栽培をはじめた地の1つでもある。しかし、最近は呉などへ通勤するものも多い。
- 2 調査年月日：1992年8月9日 午前11時から午後2時まで
- 3 方言話者：原田トシノ 女 明治34年生まれ 調査時91歳
中山カナエ 女 大正6年生まれ 調査時75歳
原田トシノ氏は幼少のころ祖父に育てられており、天保年間の祖父の言葉を、特に自然現象のことわざ、慣用句などの形で記憶されている。
- 4 調査者・調査場所 岩城裕之 原田トシノ氏の自宅居間
- 5 調査方法・調査時の様子：配布された調査票による面接調査。原田トシノ氏の妹である中山カナエ氏同席のもと、昼食をかこみつつ、雑談を交えながら非常に和やかな雰囲気の中で調査できた。
なお、以下の★印で挙げた語形は、雑談の最中などに出現した比喩語・参考事象である。また、N.R.は、No Responseで、無回答のことである。

I 《自然現象》

- 1 日照り雨 キツネノ ヨメイリ（狐の嫁入り）＜名詞＞
ソバエ（そばえ）＜名詞＞
主ににわか雨のことを言う。動詞形でソバエル。
- 2 入道雲 アギタロー {南方向に出るもの}＜名詞＞ 古
ヨダロー {北方向に出るもの＝海の方角}＜名詞＞ 古
一森綾子氏の調査によれば、熊本県下益城郡松橋町において、入道雲のことを「ヒューガタロー」（日向太郎）と呼んでいる。「アギタロー」「ヨダロー」は、安芸太郎と、伊予の「イ」は聞こえないが伊予太郎のことか。
しかし、上記のように解釈した場合、方角が逆になる。北が本州（安芸）、南が四国（伊予）である。
○アギタロート ヨダローガ デオーダラ アメ。
（南の方向にたつ入道雲と北の方向にたつ入道雲が出会ったら雨。）
教示者の祖父の代の、翌日の天気を占うことわざとして残っている呼称である。
- 3 旋風 タツマギ（竜巻）＜名詞＞
「タツマギ」と取り立てて言うことも稀である。

普段は下記のように「カジェノ フキマワシ」という。

○カジェノ フキマワシヨ フー。(風の吹きまわしだよなあ。)

4 霜柱 シモバシラ<名詞>

○シモバシラ、メヅメジ メヅメジ フンデ イキョーウツタガ フー。

(霜柱を、じめじめじめじめと踏んで行っていたがなあ。)

5 つらら ツララ<名詞>

★ せせらぎの粒が木の枝について凍ったもの コーリノハナ(氷の花)<名詞>

6 北斗七星 ホクトヒチシェー<名詞>

7 昴 スマル<名詞> 普通の言い方。すばるの音訛か。

オキヌボシ(おきぬ星)<名詞>古 稀

おきぬという女性が死んで星になったという伝説から、「オキヌボシ」とも。

○オキヌユモモンガ ホシンナツタンジャユエ オキヌボシトモ ユーガ。

(おきぬという人が死んで星になったとって、おきぬ星とも言うが。)

8 流れ星 ホーギボシ(ほうき星)<名詞>

II 《動物》

9 かわはぎ 知らない。食べることもない。

10 ひらめ ヒラメ<名詞>

ひらめでも、両目が接近しているひらめを特にメチカヒラメ(目近ひらめ)
<名詞>という。

11 ひきがえる ヒコハチ(ひこはち)<名詞> 由来は不明。

12 青大将 ヤメシリ(やめしり)<名詞> 由来は不明。

しかし、「ヤメシリ」は動作の遅い人のことも指す。

この場合は、青大将の動作の鈍さによる比喩と思われる。

13 とかげ トカゲ<名詞>

14 かまきり チョーナカタギ(手斧かたぎ)<名詞> チョーナは手斧のこと。
かまきりの触手が手斧の格好に似ていることによる比喩である。

15 みずすまし ミズマシ<名詞>

16 きつつき キツツキ<名詞>

上蒲刈島には生息していない鳥で、見たこともないという。

17 せきれい カウチドリ(川千鳥)<名詞>

シェギシェー<名詞>

18 ふくろう フクロー<名詞> 一般的な言い方。

ラルツク<名詞>

ふくろうの鳴き声による命名であろうと土地の人は説明する。

ふくろうの鳴き声を「ボロキテ ホーコー」(粗末な着物を着て奉公している。)

これも民話による。牛の世話をしなかった女中が牛に恨まれ、生まれ変わったときふくろうになった。それで、粗末な着物を着て奉公していた時代のことを反省してこう鳴くのだという。

III 《植物》

19 馬鈴薯 コーポーイモ(弘法芋)<名詞>

作物をもたらした人物名を使った命名である。

○コーボーサンガ インドノ ホーカラ ツレテギダンジャケン。

(弘法さんがインドの方から持ってきたのだから。)

20. とうもろこし コーレン (こうれん) <名詞> 高麗 (コーライ) のことか。
21. いんげん豆 ナタマメ (なた豆) <名詞>
鞘がなたの格好に似ていることによる比喩。
22. そら豆 オタフクマメ (お多福豆) <名詞>
豆の形が下ぶくれで、お多福に似ているから。
ソラス <名詞> そら豆の字音か。
23. 木くらげ N. R.
- ★ なめこ ネズミタケ (鼠茸) <名詞> ネズミの足に形が似ているから。
24. げんのしょうこ ミコシグサ (御輿草) <名詞>
花の部分の形が祭のみこしに似ているから。
25. どくだみ ジューヤク (十薬) <名詞> 〇下ニキヲ。(十の病気に効く。)
26. いたどり タジナ (たじな) <名詞> 由来は不明。
27. からすうり カラスウリ <名詞>
28. すみれ スモートリグサ (相撲取り草) <名詞>
昔、すみれを使って相撲遊びをしたことによる命名。
29. 春蘭 ジコツバコツ (じこつばこつ) <名詞>
「ジコツ」は老爺のこと。「バコツ」は老婆のこと。
ホクリボーズ (ほおくり坊主) <名詞> 由来は不明。
万葉時代、この島の沖を通った人が、この島から蘭の香りがすることから蘭
が多くあることを知った、という話から、「蘭島」という別名もあるという。
30. 母子草 ワタグサ (綿草) <名詞> 葉がやわらかく、綿のようなことから。
31. ねむの木 ウシアコエグサ (牛の肥草) <名詞>
牛にやると、牛がよく食べることから。

IV 《性向》

32. 熱しやすく冷めやすい人 アキッポイ (あきっぽい) <形容詞>
33. あわてん坊 イラ (いら) <名詞>
34. 動作の鈍い人 トロサク (とろさく) <名詞> サクは、人名出自の接辞か。
ヤメシリ (やめしり) <名詞> もともとは青大将。
動作の鈍さを青大将に例えた。
グズサク (ぐずさく) <名詞> サクは人名出自の接辞か。
35. 嘘つき サンビヤクダイゲン (三百大言) <名詞>
大きなことを三百も言うことと、土地の人は説明する。
センツラリ (千つらり) <名詞>
千くらいの嘘をさらりと簡単に言う、の意か。
マンミツ (万三つ) <名詞>
万に三つくらいしか本当のことがないという意。
36. ぼらふさ オーデッポー (大鉄砲) <名詞>
オーブロシキ (大風呂敷) <名詞>

- 37 おしゃべり ハチマンタレ (はちまんたれ) <名詞> タレは擲揄の接辞。
「ハチマン」は、おてんばのことだが、由来は不明。
- 38 冗談言い NR 特に名称はない。
- 39 口先だけの人 ウイダカ ビョーダン (浮いたか瓢箪) <慣用句>
口先だけで行動している人は、軽い人間、ということから、水に浮く瓢箪の軽さにたとえた。
○ウキウキシチョルケン フー。ニンゲンガ。ウイダカビョーダンワ カルソニ
ナガレル。ユクサキヤーシラネド アノミニ ナリタイユー ウタモ アル。
(うきうきしているからなあ。人間が。「浮いたか瓢箪、軽そうに流れる。行く先は知らねどあの身になりたい」という歌もある。)
○アブヒトワ ウイダカ ビョーダンジャケン フー。
(あの人は浮いたか瓢箪だからなあ。)
口先だけの人、というよりも、軽い人間のことをすべて言う。
- 40 とんちんかんなことを言う人 下ージン (唐人) <名詞>
下ージンモサ (唐人士気) <名詞>
唐 (中国) の人は見かけは同じように見えても言葉が通じない。同じように、こちらが何かを言っても、とんちんかんな人は話題とは外れたことを答え、何を言っているのかわからないので唐人という。
- 41 のらりくらり煮えきらない人 ナマクジ (なまくじ) <名詞>
なめくじのことであろうか。はっきりせず、ずるずるしているから。
- 42 怒りっぽい人 ハラタチブク (腹立ち河豚) <名詞>
腹を立ててふくれる様子が、ふぐが膨らんだ様子に似ているから。
- 43 気むらな人 コンジョーワル (根性悪) <名詞>
- 44 泣き虫 ナキジヨーゴ (泣き上戸) <名詞>
- 45 おてんば娘 ハチマン (はちまん) <名詞>
- 46 臍白坊主 万ンボ (がんぼ) <名詞> あるいは長音化して万ンポーに。
- 47 出しゃばり デシャバリ <名詞>
チョーシポー (調子坊) <名詞>
すぐに調子に乗って出しゃばるということであろう。ポーは接辞で擲揄を示すか。
デベソ (出臍) <名詞>
どこへでも出てゆくことを、突き出ていて隠れることのない臍に例えた。
- 48 どこへでも顔を出す人 デシャバリ <名詞>
チョーシポー <名詞> 47のチョーシポーと同様。
デベソ <名詞> 47のデベソと同様。
- 49 家にこもって 外出しない人 ヒッコミシユギ (引っ込み主義) <名詞>
★ 目が奥にひっこんでいる人 イシガキボタル (石垣螢) <名詞> 又クボとも。
奥のくぼんだところに目があり、それが光ることから。
- 50 小心者 オクビョータレ (臆病たれ) <名詞> タレは擲揄の接辞。
ショートギモ (しょうと肝) <名詞>
- 51 内弁慶 ソトヨシア ウチワル (外よしの内悪) <名詞句>
ヨコザベンケー (横座弁慶) <名詞>

- 52 社交性のない人 シミツタレ (しみつたれ) <名詞>
 53 妻に対して頭の上がない男 コシマキ マカレタ (腰巻き巻かれた)
 ○コシマキマカレタ。マツワナ コシマキ。(腰巻きを巻かれた。真っ赤な腰巻きを。)
 54 けち ヨク下ハゲ (欲ど禿) <名詞> ハゲは擲揄の接辞。
 ニギリ (握り) <名詞> にぎったまま離さない、ということか。
 55 欲張り ヨク下ハゲ (欲ど禿) <名詞> ハゲは擲揄の接辞。

V 《食生活》

- 56 大食漢 オモノグライ (大物喰らい) <名詞>
 ウシミタイイナ ヒト (牛みたいな人)
 慣用的表現として、家に大食漢がいた時、
 ○ウチニワ ベベコゴートル。(わが家では牛を飼っている。)という。
 57 ぼたもち トナリシラズ (隣知らず) <名詞> 普通の、臼と杵を使ってつく
 餅と違って、餅は餅でも作るとき音がしないので、隣にはわか
 らない、という意。
 オハゲ <名詞> おはぎ。
 58 砂糖味が薄い ハ下ノ オギオ サトーブネガ 下ーツタヨーナ <慣用句>
 (波止場の沖を、砂糖を載せた船が通ったような)
 ★砂糖味が濃い サトーブネガ ハ下エ ヨコズケニ チツタ <慣用句>
 (砂糖を載せた船が波止場に横づけになった)
 59 塩味が薄い ミズクサイ (水臭い) <形容詞> 水の臭いがする、ということか。
 60 大酒飲み ゴトペー (五斗兵衛) <名詞> 人名か。五斗ほど飲む人の意か。
 フワホ下アム (ふかほど飲む) <慣用句>
 魚のふかほど飲むということ。
 61 酒によってくだをまく サケグセガ ワリー (酒癖が悪い)
 62 酒に酔って顔が赤くなる様 ベンゲーワオ (弁慶顔) <名詞>

VI 《動作・様態》

- 63 はずかしくて顔が赤くなる様 カオガ モエル (顔が燃える) <慣用句>
 血がのぼって熱くなる状態を、燃えると表現した。
 64 土砂降りの雨 サオタツタヨーナ アメ (竿を立てたような雨) <慣用句>
 竿のように太い雨、の意か。雨の太さを竿に例えた。
 オー下シャー (大土砂) <名詞> 大土砂 (降り)。
 65 ずぶ濡れになる様 ドロネズミ (泥鼠) <名詞> ずぶ濡れになった様子。
 ドブネズミ (どぶ鼠) <名詞> ずぶ濡れになった様子。
 66 服装がだらしない様 ショータレポー (しょうたれ坊) <名詞> 由来は不明。
 67 髭がのび放題な様 ブジョービゲ (不精髭) <名詞>
 68 厚化粧をしている人 カペーツケタヨーナ ヒト (壁をつけたような人) <名詞句>
 69 背丈の高い人 ウドノ タイボク (うどの大木) <慣用句>
 ★ いわゆる共通語形のうどの大木 (体は大きくても、大きいばかりで役に立たない
 こと)は、オンジノ トービキガラという。「オンジ」は陰地。「トービキ」は
 砂糖黍のこと。「ガラ」は殻のことか。砂糖黍の殻をいうのか、体格の意味での

殻なのかは不明。

大きくても実がのらない、ということである。

★ 手が長い人 エンコノ テ (えんこの手) <名詞> 猿猴の手、か。

70 出びたい デブデブ (出ぶらん) <名詞> 由来は不明。

71 汗がひたいから流れる ブンブラアセ (ぶんぶら汗) 「ブンブラ」は象徴詞か。

72 目を丸くする バカガ テツボ (ハチータヨーナ カオ)
(馬鹿が鉄砲を放ったような顔) <慣用句>

73 口をとがらす ニテモ ヤーテモ クワレンヨーナ カオ
(煮ても焼いても食べられないような顔) <慣用句>

74 焦げ臭いにおい キナクザイ (きな臭い) <形容詞>

75 遠回りをする オメグリ (大巡り) <名詞>

76 末っ子 オトンボ (おとんぼ) <名詞> 由来は不明。

77 一生懸命頑張る シンボースル <動詞>、ヨー ヤル <動詞句>

★ よそ行きのためのいい着物 ソブツ (そぶつ) <名詞> 由来は不明。

アハハネ (蛇羽) <名詞> きれいな着物は輝いて見える。同じようにあぶの羽は透明で光っていることによる連想か。

まとめ

- 動作・様態、味覚の分野において比喩が栄えているようである。ものごとの状態を表現するのに、巧妙な言い方でそれを表現しようとする姿勢がうかがえる。また、「ヨーナ」を使った直喩的な表現も多くみられた。
- 一方で、自然現象や動植物では、そのもの自体がなかったり、あっても関心が低いことにより呼称自体が存在していなかったり、そういうものについてはいわゆる共通語が入り込んでいるようである。これらの分野では、子供が遊びに使ったり、採集などで親しんできた動植物に俚言的なもの、比喩がみられる。蛙やかまきり、植物ではこの島に豊富であった蘭などである。「ヨーナ」を使った、句形態の直喩的なものよりも語形態のものが好まれている。これは、動作様態の表現と、眼前の具体的なものを指し示す場合との性格の違いによるものであろう。
- 比喩の題材はほとんど身近なものばかりである。青大将、なめくじ、蛭や蛇、あるいは農作業の用具など(手斧、竿)、農作物など様々であるが、どれも身近である。このことは、当集落が農業集落で、教示者が農業従事者であることによるものであろう。しかし一方で、砂糖味が薄い、の表現に船が登場したり、大酒のみにフカが登場したり、また、腹を立てて膨らんだ様子にフグが登場したりと、島であるということによって内陸の農業集落とはまた違った様相を見せている。

(いわき ひろゆき 広島大学教育学部4年在学)